

2021年5月18日

## 2021年4月 Nr. 482

今回は、1人の若き女性フリージャーナリストが自分がまだ母親の胎内にいた頃、その母親が別れた相手、つまり父親を捜すことが話題になっています。

クンツさん (Frau Kunz) は27歳のフリージャーナリストです。つまり常勤ではなく、雇用契約も締結していません。チューリッヒで働き、とりわけ定期的にスイスの雑誌に寄稿しています。クンツさんは、子供のころ宇宙飛行士になりたいと思っていました。未知の地域に足を踏み入れ、その地域を踏査したかったからです。

クンツさんは、父親がいなくて寂しいと思ったことは全くありませんでした。クンツさんにとっては父親とは、元々自分が持っていなかったもの、知らなかったもの、従って、いなくて寂しいという意識もなかった存在でした。それににもかかわらず25歳の時、自分の父親だった人間を捜し始めました。父親と母親の恋愛関係は、わずか3ヶ月しか続きませんでした。母親が父親の元から去ったとき、後にニーナ (Nina) と名付けられたその娘、つまりクンツさんは、やっと3cmの大きさになったばかりで、体重はひよっとしたら4gだったかもしれません。

子供が父親なしで成長すると、人から気の毒に思われます。しかしながら、クンツさんは、父親なしで成長することを、特別まれなことであったり、異常なことであったり、または好ましくないことなどとは決して感じなかったといいます。幼稚園では他の子供達はそのようなことに興味がありませんでした。しかしながら、クンツさんが学校に通うようになると、両親のための授業参観日がありましたが、いつも母親が来ていました。すると、クンツさんは他の子供達からなぜ父親は来ないのか尋ねられたことがありましたので、単に父親がいないからと答えました。これを聞いた他の子供達はクンツさんに同情しましたが、この同情がクンツさんを困惑させました。なぜなら、他の時は〔それ以外においては〕子供達がクンツさんに対ししばしば全く親切とはいえなかったからでした。クンツさんは小柄で、痩せており、そのことで時々遊びの仲間に入れてもらえませんでした。

クンツさんの母親は当時、まだ大学生でしたし、お金を稼ぐために喫茶店や居酒屋でアルバイトをしていました。父親は自分が原因となって生まれた子供に対する養育費を全く支払いませんでした。クンツさんの母親は娘のクンツさんと一緒に大きな住居共同体に住みました。その結果、そこには、クンツさんの母親が大学の講義を聴いたり、喫茶店でお金を稼いだりしたとき娘の世話をしてくれる誰かが常にいてくれました。クンツさんの母親

は、保育園で娘を引き取るために喫茶店の仕事を他の同僚たちより早い時刻にやめなければならなかったとき、しばしば気がとがめたものでした。

ニーナにとっては、母親と祖母が両親の役割を果たしていました。その祖母は二人の娘、すなわちニーナの母親と叔母ですが、70年代に同じように女手一つで育て上げました。祖母はニーナのためにいつも助けてくれました。従って、父親がいなかったことはニーナにとって重要性を持ちませんでした。それ父親の不在は、ニーナが自らの想像力の中で希望やイメージに従って満たすことができるひとつの空席・何もないスペースでした。

しかしながらいつかあるときに、それにもかかわらず、次第に謎解きをすべき時が来ているのではないかと考えました。他人事として興味を持つことなく、どうしたら子供をこの世にもたすことができるかを理解できなかったことが生物学的な好奇心になりました。クンツさんは、父親が連絡を寄こすことを邪魔している可能性があるものは何なのかについて、繰り返し自問しました。このことについても是非謎解きをしたいと思いました。母親からは父親の名前と生年月日を聞いていましたし、父親が他の土地の出身であることと、カメラマンとして働いていたことは知っていました。

クンツさんはインターネットで父親を捜します。そして難民問題を扱う会議に関するあるインターネットのサイトで彼の名前を見つけます。そこには彼が撮影した写真もありました。クンツさんは、この会議の主催者に問い合わせ、クンツさんからの伝言を父親であるそのカメラマンに取り次いでくれるよう依頼します。しかしながら、そうしてみると、クンツさんは、自分が本当にこの人と知り合うことを望むのか、その人がクンツさんにとって、自分の想像力によって好きなように満たすことができた空席・何もないスペースという位置づけのままであるほうが良くなかったか、と自問します。

しかしながら今やそれは既に遅すぎました。なぜならば、クンツさんのインターネット経緯の伝言に対する彼からの返答がクンツさんの携帯電話に着信したからです。それは12行のものでした。クンツさんは同じ日に返信しました。二人とも互いに書き合いましたが、クンツさんにとって不快だったのは、父親なくして育つことはいかにクンツさんにとっては困難だったに違いないかを彼が繰り返し書いてきたことでした。彼は、クンツさんの他にも、父親なくして育ち、父親を捜した若い女性を何人か知っているといいます。しかしながら、クンツさんの場合、父親がいなくても全くと言っていいほど寂しいとは思わなかったのです。当時何が起き、そのことは父親にとってどうだったかについては、クンツさんは返事をもらいませんでした。これからそれがどうなるかについては、クンツさんには分かりません……。

ところで、クンツさんは、1993年にスイスで生まれましたので、27歳（番組放送当時）です。チューリッヒ大学で社会経済史（Sozial- und Wirtschaftsgeschichte）を学び、2017年よりコラムニストおよびジャーナリストとして活動しています。2018年および2020年にはスイスの年間優秀女性コラムニスト（Kolumnistin des Jahres）として選出されました。

さて、クンツさんのその誕生にかかわる話ですが、テキストによりますと、クンツさんの母親が父親である男性と関係を結んだ日に経口避妊薬を服用したものの、胃腸炎（感染性下痢）のため嘔吐してしまい、薬効がなかった結果、クンツさんが生まれたということを母親から聞いているとのこと。従って、クンツさんによれば、現在自分が存在しているのは、この胃腸炎（感染性下痢）のおかげであると少し笑いを交えて語っています。そしてクンツさんの母親は父親からその後養育費の支払を受けなかったとされていますが、そもそも父親がクンツさんの誕生を知っていたのでしょうか。クンツさんの母親から父親に対して、クンツさんが生まれたことを伝えていたのかどうかテキストでは明確ではないように思いますが、もしそうだとすれば父親からの養育費の支払いを受けることは難しかったらと思います。一方でもし母親が父親に対しクンツさんが生まれたことを告げていたのに父親が養育費を払わなかったとすれば、スイスでの法律に基づいた責任の所在に関しては正確なことは分かりませんが、おそらく、当然父親に支払義務が生じるのではないかと推測します。

また、クンツさんの母親が父親のもとを僅か3ヶ月で去った理由は何だったのでしょうか？私は当初父親が母親のもとを去ったと想像しましたが、逆に母親から父親のもとを去ったことが分かりました。その理由についてはテキストにおいても言及されていないため分かりませんが、何か特別な理由があったのか、それとも若さ故に一時的に燃え上がった恋愛感情が消えただけなのか分かりませんが、いずれにしても、その後生まれたクンツさんには結果として初めから父親がいなかったわけです。その父親なくして育ったことについて、全くまれなことであったり、異常なことであったり、または好ましくない（seltsam, außergewöhnlich oder schlimm）とは思わなかったと語っていますが、これには驚きました。

テキストおよび課題によれば、クンツさんの祖母も70年代に女手一つで二人の娘、つまりクンツさんの母親と叔母を育てたということです。70年代といえばまだ、女性が1人で子育てをするのは現在よりもさらに困難を伴っていた時代だと思われませんが、その様子を直に見ていたはずの母親も祖母と同じ険しい道を選んだわけ。祖母の生き様を見ながらもそれをむしろ肯定的に捉えていたのでしょうか。それとも単に短慮や成り行きまかせただけだったのでしょうか。

クンツさんは、当初父親捜しを始めた時、まず警察に相談に行ったところ、私立探偵事務所へ行くように助言されました。そこでチューリッヒに事務所のある 47 箇所もの私立探偵事務所の中から一番気に入ったところに相談をし、見積もりを依頼したところ、9,000 スイスフラン（約 108 万円）の費用がかかることが判明したといいます。フリージャーナリストとして簡単に支払える金額ではなかったためと、自分の仕事柄インターネットを使った調査には馴染みがあることから、自らの手で父親捜しを行うことにしました。グーグルでの検索というのもインターネットの発達した現代だからこそ可能な手段だと思いますし、クンツさんの調査能力も生かせる手段だと思い、この点は大いに納得できました。

私にとってスリリングな場面だったのは、何と言っても父親からの最初の返信があった時です。父親は 25 年ぶりの娘からの知らせに対し喜びと驚きで応答しました。ところが、その後のメールのやり取りでは、父親なくして育つことはいかにクンツさんにとっては困難だったに違いないかを彼が繰り返し書いてきたことから次第に不快な気持ちになりました。私としてはクンツさんと父親とのメールのやり取りでは小説を読んでいるときのような感情移入があり、内心ハッピーエンド (ein Happy End または ein glückliches Ende) を期待していたからでしょうか、期待したものと違った結果となり、私は正直、残念だと思いましたし、少々失望しました。今回の放送が行われたのが 2020 年 5 月でしたから、ちょうど 1 年が経過したことになります。クンツさんと父親との関係はその後の 1 年でのような展開を見せているのでしょうか。クンツさんが不快の念を持ったまま連絡が途絶えてしまっているのか、何か感情面での納得感が得られているのかどうか、また、いずれの展開をたどっているにせよ、そのような状況に対してクンツさんの母親は何を思い、どのように感じているのかなど、他人事ながら気にかかる点がいくつかあります。

さて、新型コロナワクチンの接種が世界の各国に比べ非常に遅れている現在の日本ですが、先日ワクチン開発者であるバイオンテック社のドイツ人夫妻の研究者が 2021 年 3 月にドイツ連邦共和国功労勲章 (Bundesverdienstkreuz) を受章したとのニュースに接しました。通常ワクチン開発には 8~10 年かかるところをプロジェクト名である Lichtgeschwindigkeit の通り何と 1 年で成功させたこと、またこの夫妻はトルコ系移民家庭の出身であることなど初めて知り、驚きました。加えて、バイオンテック社は 2008 年設立の非常に若い企業とのこと。また、余談ですが、ドイツでは勲章をネットオークションなどで購入することができるようですが、正規に受章した人以外は身につけることは許されないということも知りました。

K. K.

2021年6月23日

## 2021年5月 Nr. 483

さて、今回は、DV被害から女性を保護する「女性の家」が扱われています。

「女性の家」〔フラウエンハウス、DVシェルター〕(Frauenhaus)とは、暴力的な夫またはパートナーから女性を保護するための場所です。多くの女性はそのような状況に置かれたとき、両親や親戚に庇護を求めます。経済的に自立している女性はとにかくホテルの部屋を借りることもできます。「女性の家」に入るためには、暴力的な夫とはこれ以上もう一緒に暮らす気持ちを持ってないというだけでは十分ではありません。

入居の前提条件は、当該女性が暴力を受けているという事情があることですが、この暴力は肉体的なものである必要はありません。肉体的な暴力だけが「女性の家」への受け入れ申請への資格があるわけではありません。当該女性を精神的に苦しめている言葉の暴力でも足ります。最初の連絡のために女性自身が「女性の家」へ行く必要はありません。電話をすることができますし、親しい女性にその女性の代理で連絡を取ってもらうよう依頼することもできます。「女性の家」の職員たちがそこへの転居をその女性と一緒に計画を練るということも、時々起きます。

南西ドイツ放送のこの放送のためにホルツさん (Frau Holtz) は2018年、ある「女性の家」に二ヶ月間庇護を求めていた3人の女性と話しました。聴取者は彼女たちのファーストネームだけ知ります。3人のうち、一番年上はゲルリンデ (Gerlinde) さんという名前前で1958年生まれです。シルヴィア (Sylvia) さんはインタビュー当時、41歳でした。ズザンネさん (Susanne) は1989年生まれです。

ゲルリンデさんは、1980年1月8日に「女性の家」へやって来ました。ホルツさんがこれについては「人生」 („Leben“) というシリーズ番組において伝えましたが、そこで5ヶ月間やすらぎを得ました。ゲルリンデさんがそこにやって来た時、息子は6歳、娘は4歳でした。彼女は子供達を連れて引っ越したのです。さらには、服を一杯詰めた1個のスーツケースと60マルクしか所持していませんでした。ゲルリンデさんは、実は暴力的な家庭の出であり、そこからできるだけ早く逃れたいと思っていました。

ゲルリンデさんが1人の男性と知り合ったとき、その人は自分が理想として描いていた男性像そのものでした。すぐにでも結婚したいと思いました。まだ16歳になったばかりでしたが、大きな愛を見つけたと信じました。しかしながら、ドイツでは1974年までは21歳でようやく成年に達しているとされていました。1975年1月1日以降ようやく、ド

ドイツでは既に 18 歳をもって成年とされました。2 人共どうしても結婚したいと思い、子供が生まれれば結婚を強行できると考えました。ゲルリンデさんが息子を産んだとき、まだ 17 歳になったばかりでした。そこで 2 人は結婚でき、確かに家庭を持ちました。

ところが、結婚当初のすばらしき日々は続きませんでした。上述した通り、ゲルリンデさんは子供の時既に、父親の暴力に被害を受けていましたし、今や夫がますます暴力を振るうようになってきました。15 歳、16 歳では、ゲルリンデさんが父親の中の悪に気づくにはまだ若すぎました。なぜならば、父親とは互いに愛し合っていたからです。ところが、暴力はだんだんエスカレートする一方でしたし、ゲルリンデさんの交友関係にも影響を及ぼし、壊れていきました。

夫のもとを去る切っ掛けとなったのは、自分の子供達を父親から守り切れなくなったからです。夫がほんの些細なことで食事中に娘が椅子からひっくり返るほど、顔をたたきましたが、その時、娘は 4 歳でした。さて、そこでゲルリンデさんは離婚したかったのですが、夫が離婚届けをゲルリンデさんの弁護士から受領した場合、ゲルリンデさんが自宅にいられなくなることは明白でした。

従って、ゲルリンデさんは違った方法をとりました。ゲルリンデさんが、電話によるキリスト教司牧に電話した時、電話の向こう側に親切な女性がおおり、「女性の家」に相談するようアドバイスしてくれました。そのようなものが存在することをゲルリンデさんは知りませんでした。

ゲルリンデさんがその「女性の家」でとりわけ大きな支援をもらった女性職員は、ブリギッテ (Brigitte) さんという名前でした。彼女は慈母のように優しい友人となりました。そのブリギッテさんもまた非常に多くの辛い経験をしていました。しかしながら、その「女性の家」では 2 人とも朝食の時に歌ったこともありました。そこでは 2 人は子供達と部屋中をダンスして回ったり、図画工作をしたりもできました。互いに助け合いました。あれこれすべてのことが済んで、休養できるようになりました。しかしながら、その後の人生・生活においてはまた、1 人でやらなければなりません。例えば、住まいを捜したり、親戚へ改めて連絡をしたり・・・。

さて、ドイツでは女性の 5 人に 1 人が一生の間に DV を経験しているということを今回の放送で初めて知りましたが、ドイツで DV がそれほど頻発していることに大変驚きました。ドイツ連邦刑事庁によりますと、2018 年に 11 万 4 千人の女性が身体的または精神的暴力に晒され、122 人の女性が夫やパートナーまたは元パートナーによって殺害されたとのことです。一方で、男性についても 2 万人超が暴力を受けたとのことです。女性だけの問題で

はないようです。日本においては、警察が把握する範囲では2020年に8万3千件弱のDV被害が発生したということです。事の性質上、ドイツにおいても日本においてもいわゆる潜在的な実際の数値（-e Dunkelziffer）はもっと多く存在し、実数がどれくらいなのかは分かりませんが、ドイツ、日本共増加傾向にあるのは間違いないようです。また、先程の警察のデータとは異なりますが、内閣府によりますと、今年5月末時点での速報値として、2020年度のDV相談件数が約19万件で、過去最多となったと明らかにしたとのことです。2019年度の11万9,276件から1.6倍に急増したことになりますが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う在宅時間の増加や社会的ストレスが要因になったとみられるということです。ひょっとしてドイツでも同じような傾向があるかもしれません。

ドイツでの「女性の家」の歴史を調べてみました。世界で最初の「女性の家」はイギリスのロンドンで1971年にでき、その後スコットランドのエジンバラやオランダのアムステルダムにも次々と設立され、ドイツでは1976年にベルリンとケルンにできたようです。現在ではドイツに350カ所もあり、キリスト教団体や労働福祉団体、市民有志団体など様々な組織が運営しているそうですが、財政的には政府や自治体がこれを支えているようです。一方、日本での状況については、私の調べた限りではデータを見つけることができませんでした。日本では民間団体が運営するDVシェルターの数はまだ少ない上、財政的にも厳しいところが多く、政府が財政支援を強化し始めたのはここ数年のことだといえます。政府や自治体が財政的にも民間団体を支え、一体となってDV被害者支援に取り組むドイツとは対照的だといえるようです。日本でのDV被害の発生件数がドイツに比較しやや少ないものの、DV相談件数は決して少なくはないことを考えますと、DVシェルターにより救済されない被害者が現在放置されている可能性もありますので、政府には早急に対策を望みたいところです。

さて、ゲルリンデさんについては、課題および放送において、暴力を振るう父親のもとで育っただけでなく、その後結婚した相手の夫からも暴力を受けていたということが述べられています。ひょっとするとゲルリンデさんのように、子供の時だけでなく、結婚後も受けた二重の暴力という事例は、多いと言えないまでもまれではないのかもしれないかもしれません。だとすると、本人にとって辛く、耐えがたい経験であると同時に、社会的な損失も決して少なくはないのではないかと思います。また、ゲルリンデさんの娘さんが幼い頃父親から受けた暴力がその後の人生に悪影響を与えていなかったことを願うばかりです。

K. K

2021年7月24日

## 2021年6月 Nr. 484

今回は、「母親と娘の関係」が話題になっています。

リートハマーさん (Frau Riedhammer) は、多くの女性とその母親との関係について話しました。彼女たちの中には、母親ととても親密な女性もいれば、母親と衝突している女性もいました。しかしながら、すべての女性について言えるのは、母親との関係はユニークで特別であるということです。なぜならば、母親というのは誰にとっても関係を結ぶ最初の人間だからです。これは娘だけでなく、息子にもあてはまります。しかしながら、娘には子供を授かり得るといふ事情が加わります。つまり、母親のようになり得るのです。それゆえに、この関係は特に緊密ですが、また衝突が多いものでもあります。

多くの女性は自分の母親のようにはなりたくないと思っています。ヴィーベさん (Frau Wiebe) は、女性たちがどのように自分の母親を愛し、どのように母親と衝突するかについて本を書きました。母親と娘の間には大抵、両方、つまり衝突の可能性だけでなく愛情もあります。ヴィーベさん自身も時折、自分の母親によく似た人間との友情を求めたということですし、とても努力し、その友人になるべく努力したといひます。

娘たちにとって母親は最初のお手本です。しかしながら、クリュルさん (Frau Krüll) は、娘たちはすべて、自分の母親よりより良くあろうと思っているという見解です。娘たちは別のことをやろうとしますし、多くのことを別のやり方でやろうとします。リートハマーさんが自分の母親に対し、自分たちの関係をどう思うか尋ねたとき、母親はリートハマーさんに、自分たちの関係はおそらく大抵の母親と娘の関係と同様、アンビバレントな感情、つまり相反する感情を併せ持ったものだろうと答えました。そこでは親密さを求めますが、するととても素早く親密すぎるほどになるといひます。

リートハマーさんは、自分のごく幼いころの自身の母親についての思い出を尋ねられると、母親の手を思い出します。それは長い指と短い爪をしており、手はクリームを塗ったばかりで、常に手入れが行き届いていました。リートハマーさんにとっては、母親と娘の関係は、リートハマーさんが想像できる最も親密な身体的関係です。一緒に話し合うことは、そこでは全く重要ではないといひます。リートハマーさんは、自分と母親が散歩の途中でベンチにちょっと腰を掛けることができましたが、一言も言葉を交わさず座っていたことを報告しています。しかしながら、二人が並んで無言で座っている間、互いに絆、つまり繋がっていることを感じていました。



ヴィーベさんは、生後数ヶ月や数年におけるごく幼い頃の経験は全人生・生涯には非常に重要であるという意見です。最も重要なのは、女の子たちにとっては自分の母親との関係だといいます。諸研究により、成人女性がごく幼い頃に母親との関係に信頼をおけないという感情を持つ場合、恋人、ボーイフレンドおよび知り合いとの関係でより大きな困難を抱えることが判明したといいます。

子供においては、その母親が例えば、職業上のまたは経済的な、つまり子供に関係ないような種類の、個人的な問題を抱えている場合、不安感が生じるといいます。しかしながら子供はこれを理解できず、母親の行動は子供である自分自身に関係関連づけるといいます。子供は、母親が自分のほうに向いてくれない、自分にほほえみかけてくれない、母親がストレスにさらされて、子供の面倒を殆ど見ないことだけは分るといいますし、そのことから子供は自分がなにかがおかしいと推察します。従って、母親と子供の関係は、生後数年のごく幼い頃においては、全人生・生涯にとっては非常に重要であり、特に娘にとっては重要だといいます。

クリュルさん (Frau Krüll) は女性社会学者です。クリュルさんは長年、自分の母親で苦勞している女性のためにセミナーを開催してきました。クリュルさんは、この諍いは娘が母親に対し多くを求めすぎていることに原因があるとしています。娘からすれば母親は完璧でなければなりません。しかしながら、当然ですが、母親がそのようなことは有り得ません。母親というのは、一人のちゃんとした、正しい母親であるべきですが、しかしながら、それは、状況によることです。母親がこどもをほったらかすことは許されませんが、世話を焼きすぎてもいけないのです。このゼミナールにおいてはまず、参加する女性が母親宛に手紙を書きます。その後自分の母親役を務めます。そして、女性たちは母親の気持ちになって考えるために、母親の歴史・物語を一人称形式で語ります。視点を変え、母親側から関係を観察することが重要です。母親の間違いを非難する代わりに、女性たちは、母親は母親ができる範囲での最良の母親だったことが分るといいます……。

さて、社会学者のクリュルさん (1936 年生まれ) は、母親で苦勞している女性のために開催しているゼミナールが紹介されていますが、母親からの視点で語るというやり方がとてもおもしろい思いましたし、なるほどと納得しました。セミナーにおいて講師と受講者との間で具体的にどのような言葉が交わされているのかが興味が湧きます。また、インターネットで検索しますと、クリュルさんは数多くの書籍を出版しているようですが、その中に正に今回のテーマに関連するものとして、„Die Mutter in mir: Wie Töchter sich mit ihrer Mutter versöhnen“ (2007 年 2 月刊) という本も執筆していることも分かりました。

また、課題・放送に登場するヴィーベさんは、フリーの女性ジャーナリスト（1977年生まれ）ですが、放送で紹介されていますように„Unsere Mütter“（2019年3月刊）という本を書いています。サブタイトルは、„Wie Töchter sie lieben und mit ihnen kämpfen“です。ヴィーベさんは、この本の執筆のために多くの女性を取材したそうですが、放送でも一部が紹介されているウルリケ（Ulrike）さんの場合が印象に残りました。ウルリケさんは、40代初めに高齢の両親（80歳前後）の面倒を見るために両親の家に戻ってきます。父親はまもなく他界しますが、母親をその後100歳位まで、つまり約20年間介護をすることになります。介護だけでも大きな負担だったはずですが、母親との戦いも含んだ20年でしたので、その重みを感じざるを得ませんでした。

ところで、7月21日付け朝日新聞（夕刊）にタレントの青木さやかさんとその書籍が紹介されているのが目に留まりました。タイトルは「母」（2021年5月刊）。青木さんは、確執のあった母親と向き合い、母親に対して感じてきたことを書いたということです。国語教師だった厳格な母親は、彼女に固定観念を押しつけ、褒めてもくれなかったそうです。そして母親との問題が軸になって、自分自身を愛せなくなり、人間関係にも大きな問題を抱えたといいます。結局、亡くなる前にホスピスに入っていた母親と仲直りができ、感謝することもできたといいます。青木さんは自分の経験から、小学生の娘さんに対しては、「勉強なんてできなくてもいいのよ」って言っているそうですが、娘さんからは「ママといっても頭良くなんない」って怒られるそうです。青木さんも母親と同じで娘さんに押しつけてしまうことを反省し、ちょっと上のお姉さんという気持ちで娘さんの話をよく聞くよう心掛けています。この姿勢は好ましいだろうと思いますし、今後の子育てもうまくいきそうな気がします。ただ、娘さんが多感な思春期を迎え、そしてさらに成長する過程で、さまざまな葛藤も生まれてくるのだろうとは思いますが……。青木さんについては、私も名前くらいは知っていましたが、今まで特に関心を寄せていたわけではありませんでした。従いまして、今回の課題に取り組んでいなければ彼女の書籍に関する新聞の紹介記事が私の目に留まることはなく、この記事を読むこともなく、スルーしてしまっていたと思われそうです。今後は、彼女をテレビや雑誌などで見たとき、いままでとは違った目で彼女を見るだろうと思います。

さて、私自身の身近な周辺だけを見回してみますと、「母親と娘の関係」が存在するか、または存在したのは、私の母と妹、私の妻と義母、私の妻と娘くらいです。そして、その間に私の知らないところでは、ひょっとすると今回の放送・課題で触れられたようなものがあつたのかもしれませんが、どのような関係があつたのかは男性である私自身としては伺い知ることはできませんでした。もっとも私が予めそのような問題意識を抱いていたならば、気が付いていたこともあつたかもしれません。

K. K

2021年8月21日

2021年7月 Nr. 485

今回は、政治家に対して各種団体・組織などが行う「ロビー活動」が話題になっています。

ところで、私たち („Direkt aus Europa“) の音声録音は、最初の 20 年間にはカセットテープに収められていましたが、この 17 年来、つまり 2004 年からはようやくインターネットで聞くことができるようになってきました。この録音をより正確に聴き取りたいと思う人は、引き続き録音用カセットテープにダビングしたほうが良いでしょう。なぜならば、そのようにすることによりある録音部分・箇所を繰り返し聴くにはより簡単だからです。従って、録音はインターネットで聴くことができるようになっていますが、テキストと注釈は引き続き、カセットテープの時と同じように A 面および B 面毎についています。

6 月号においては B 面の冒頭において、いかに企業が学校の生徒に影響力を及ぼそうとしているかについてレポートがなされましたが、今回は B 面の冒頭においてまた、企業の影響力がテーマになっています。しかしながら、今回の 7 月号には個々の企業の影響力ではなく、企業の加盟している連盟・団体の影響力および他の組織の影響力が問題になっています。これは何も新しいものではなく、既に 1640 年には請願者らが自分たちの願いごとを国会議員に伝えるために英国議会のロビー、つまり議会の控え室にやって来ていました。

しかしながら、今はもはや個々の市民ではなく、大きな団体・組織の職員がやって来ます。そして、彼らはベルリンだけではなくブリュッセルにおいても、控え室だけではなく、議事堂や公開の委員会会議にもやって来ます。彼らはロビイストと呼ばれます。成功を勝ち得るために、経済界の代表者たちは、あたかも自分たちの組織やその組織のメンバーの利益が問題になっているのではなく、公共の福祉やすべての市民の国民経済に関する利益が問題になっているかのようなふりをしなければなりません。

これが何かの環境保護団体の誰かである場合、その人は即座に、自分にとって何が問題かを言います。というのは、環境問題はすべての人にとって関わりがあるからです。しかしながら、ある経済界の団体の代表者はまず、国会議員との良好な関係を築くようにしなければなりません。その代表者はある議員に話かける前に、その人が一体どのような人物なのかを既に正確に調べておきます。そして信頼を築くために、その議員とはまずは例えばサッカーについて話します。

ヘルプストさん (Herr Herbst) は欧州議会における CDU の構成メンバーですが、そこでは東バルト海におけるたら漁獲量の規制法案に取り組んでいます。そこでは余り多くのたらを取るべきではないということがテーマです。その法案においてより少ない漁獲高が定められると、そのたらを取って、販売している企業は怒ります。そこで、それらの企業は、ブリュッセルの議員に影響力を行使するために、多くの働きかけを行います。しかしながら、ヘルプストさんは、環境保護に熱心に取り組んでいる組織はまた経済的な基盤がまったく整っており、ひょっとすると企業の代表や企業加盟の代表より良好であるかもしれないことに気が付きました。

放送がアナウンスされる前にゲッペルさん (Herr Göppel) が既にある重要なことを言うのが聞こえます。ゲッペルさんは 1950 年生まれですが、長い間連邦議会議員において CSU の議員として議席を有してきました。彼が CDU/CSU 会派の 300 人以上から構成される会派の会議において何か発言したとき、他の議員たちの多くは、彼自身が正しいと考えることを主張しているという気がしましたし、彼が言うことを信じているという気がしました。しかしながら一方では、彼の同僚議員の中においては、ゲッペルさんは、同僚議員らが述べたものは彼ら自身の議論ではないという気が時折しました。それは、彼が既に連盟・団体の代表者との会話から既に認識した議論でした。

ビューローさん (Herr Bülow) は、SPD の連邦議会議員です。しかしながら、SPD 会派から脱退しており、今やロビイストの影響に対し個人として積極的に対峙しています。ロビイストたちは近くのカフェや諸委員会が開かれる部屋の前およびその部屋の公開会議においては後方の片隅に座り、会議においてどの議員が何を発言しているかをメモするだけでなく、120 人のロビイストたちは、議員が事務所を構える建物の一つの入館証さえ保有しています。ビューローさん (Herr Bülow) によると、議員は毎週、ロビイストとは 20 ~ 30 回ほどのコンタクトがあるといいます。

ブリュッセルの欧州議会では、ロビイストが自らの活動を申告したり、議員がロビイストとの接触を申告したりしなければならぬ登録簿があります。これに類するようなものはベルリンにはまだありません。連邦政府は、照会に対して、2006 年において限定して、多くの連邦省において連盟・団体および企業の 100 の代表らが法律の文書化に関与したことを回答しました・・・。

さて、「ロビー活動」という言葉については、振り返って見れば、ちょっと記憶が曖昧なのですが、おそらく私がまだ中学生頃の社会科において「圧力団体」という言葉を通じて学んだのが最初だったのではないかと思います。現在の中学生または高校生の教科書に「圧力団体」という言葉の記載がまだあるかどうか分かりませんが、最近のマスメディアにおい

でも余りにしなくなったように個人的には感じます。「圧力団体」という言葉は、いつ頃からか米国において広く行われている「ロビー活動」という言葉に置き換わっているような印象を受けます。

そして、その「ロビー活動」ですが、放送および課題によりますと、既に1640年には請願者らが自分たちの願いごとを国会議員に伝えるために英国議会においてなされていたということを今回初めて知りました。「ロビー活動」が政治と密接に繋がっているとは思いましたが、その起源が17世紀半ばまで遡ることができるというのはとても驚きました。一方ではまた、Wikipediaによれば、「ロビー活動」は19世紀初めに米国で登場した言葉と見られているようですが、本格化したのは、1869年から1877年の期間に政府を率いた米国のグラント大統領の時代だそうです。ヘビースモーカーでありホワイトハウスでの喫煙を妻に禁止されていたグラント大統領は、付近のホテルのロビーで葉巻を楽しんでいました。彼がしばしばこの場所に出没することを知った関係者は、ニコチンの助けを借りて上機嫌な大統領への陳情をこのロビーで行うようになったという、ロビー活動の語源に関するおもしろい逸話が紹介されておりました。

もともと、歴史に残っているものとしては上記の通りだとしても、政治とロビー活動が切り離せない関係であるとするれば、組織だって行われなかったにせよ、私の想像の域を出ませんが、ひょっとして古代ギリシャ・ローマ時代から存在したのではないかとも思います。最近の日本では、政治家、つまり議員と「請願」者との間に金品の受け渡しが行われ、賄賂案件として起訴された事例がありましたが、ロビー活動も行き過ぎると犯罪になる可能性があることを示していると言えます。ドイツにおいては今年の3月、与党CDU議員2名がマスク取引において金銭を授受していたという汚職疑惑が報じられ、南部州と西部州の州議員選において与党CDUが敗北したというニュースがあったことを思い出しました。マスク業者から「請願」があったかどうか不明ですが、9月の連邦議員選挙への影響もあると見られ、今後の成り行きが注目されているようです。

また、マスメディアが立法・司法・行政の3つの権力に並んで「第4の権力」と言われることがありますが、ロビー活動はこれに続く「第5の権力」とも称されることがあるといます。この表現もその影響力を考えれば納得できます。一方、インターネット時代の現代ではSNSを「第5の権力」と言う向きもあるようです。

ところで、放送および課題において、欧州委員会や欧州議会が開催されるブリュッセルと連邦議会のあるベルリンの対比がされているのが興味深いと思いました。ブリュッセルでは、ロビイストが自らの活動を申告したり、議員がロビイストとの接触を申告したりしなければならない登録簿がありますが、ベルリンではこれに類するものは存在しないとい

ます。このようなものが日本においては存在するかどうか調べられませんでした。存在するとは思えません。ベルリンや東京が遅れているとも言えますが、恐らくブリュッセルが先を行っているのだらうと思いますが、ロビー活動の透明性の確保という点からもベルリンや東京においても必要ではないでしょうか。

K. K